

[演題3]

障害者理解を目的とした体験型研修プログラムの開発 —おもに小学生を対象として—

吉田 海斗¹⁾, 森 美月¹⁾, 山岡 柊太¹⁾, 吉成 達哉¹⁾, 糟谷 佐紀²⁾

1) 神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 社会リハビリテーション学科 3年

2) 神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 社会リハビリテーション学科

神戸市北区に位置するしあわせの村を運営する公益財団法人こうべ市民福祉振興協会（以下、協会）は、障害体験を通じて車いす使用者や視覚障害者、聴覚障害者についての理解を深めることを目的とした「ふれあい体験学習」を行っている。近年のユニバーサルデザインの普及や障害者理解が進む状況に対応した体験学習となるような内容見直しの依頼を受けて、専門ゼミナールにおいて内容を検討した。その過程と、提案した体験学習内容について報告する。

2021年4月に、協会職員よりこれまでの体験学習の内容、問題と感じている点について説明を受けた。これまでは、車いす体験は介助技術の習得、視覚障害体験ではアイマスクを付けて介助なし歩行の困難さの理解を中心としていた。体験学習の受講生は主に神戸市内の小学4、5年生であった。我々は、体験時だけでなく体験後の生活においても、小学生が障害者にさりげなく声をかけられる、手を貸せるようになることを目的として体験内容を検討した。

車いす体験ではどういう環境を走行することが困難であるか、視覚障害体験では怖さを感じさせるのではなく、どのようなサポートがあれば怖くないかを感じ取ってもらうこととした。その結果、車いすは介助体験ではなく、自走でスラローム競争を提案した。我々が実際に体験し、競争する距離やコーン（工事用）の数、間隔を決めた。また、落ちた物を拾いにくいことを体験してもらうために、走行ルートの最後に地面に置いた物（ボールなど）を拾ってゴールするという課題を加えた。視覚障害体験では、視覚障害者が何を頼りに歩行しているのかを知るために、コーンを白杖で探りながらスラローム歩行し、鈴の付いた最後のコーンを鳴らせばゴールとした。二人一組となり、コーンから離れそうになると、介助者が言葉で指示を与えることとした。10月、我々が企画した体験学習を小学生が実際に行う機会に立ち会うことができた。